

拓く通信



当事者の方々と安心・安全の会場づくり

社会福祉法人拓く 統括本部長 北岡 さとみ

4年ぶりに盛大な祭りの開催となりました。例年参加いただいた団体に加え、新たな団体や企業の皆様と一緒に祭りを盛り上げることができました。

これまで子どもから高齢者、障がい者など誰もが参加しやすい祭りを目指し、多彩な企画を展開。今回は、会場全体のユニバーサルデザインに取り組みました。視覚障がいや聴覚障がい当事者の皆さんと事前に意見交換しながら安心・安全の会場づくりの検討を重ね、文字だけではなく、販売する商品を絵で表記するピクトグラムを作成。遠くからでも販売している場所が分かるように工夫し、また、床にはカラーで矢印や文字を表し、目的地への誘導を心がけました。準備の段階から当事者の方々に打ち合わせに入っていただいたこともあり、当日は障がいのある方もたくさん遊びに来られており、数ある祭りの中で、ボレボレ祭りは障がい者が安心して遊びに来ていただける祭りに成長したように感じました。次回以降も当事者の方々と一緒に会場づくりに取り組みたいと思います。



26店の飲食バザーなど、大勢の皆さんで賑わう会場。
横から見てもテントの店が目立つように、商品をピクトグラム(絵文字や絵単語。見た目で分かる案内用の図記号)にして黑白表記した。ピクトグラムは、久留米大学看護学部の皆さんと作成。

社会福祉法人拓く

1970年代より久留米市で展開した障がい児の保護者と教員による統合教育運動が原点。2000年10月法人設立。障がいが重くても誰もが地域で暮らるために「コミュニティづくり」に取り組んでいます。

事業所 出会いの場ボレボレ・夢工房・グループホーム・ボレボレ居宅介護支援センター
出会いの場Leo・相談支援センターカリブ・久留米市西部障害者基幹相談支援センター

若い学生とのコラボで祭りを盛り上げた!

久留米商業高等学校、久留米工業大学ASURAの皆さんとパンフレット作成や案内板づくりを行った。大人の固定概念ではなく、時代の変容に伴う自由な発想と新たな価値観がこれからは重要であることを実感。



ラグビーチーム「ルリーロ福岡」の初参加

うきは市に誕生した地域密着型のラグビーチーム。オレンジのユニフォームを着た選手が会場に登場!準備から片付けまで力仕事もなし、祭りを盛り上げてください。ボレボレ祭りは多種多様な人々が交流する場としても定着している。



- ボランティア総数 560名
- イベント出演者数 160名
- 広告協賛(お祝い金) 313件

ご協力、
ありがとうございました。
次号にて詳細を
報告します!



活動を更新中!
拓くウェブサイト
QRコード

拓く通信

2023年12月号(年2回発行)

発行・社会福祉法人拓く 法人本部

〒830-10071

福岡県久留米市安武町武島468-12

TEL

0942-127-12039



理事長メッセージ

社会福祉法人拓く 理事長 馬場 篤子

当法人の本部がある安武町の高齢化率は34.21%(2023年4月現在)、人口に占める後期高齢者の割合は12.52%です。あつという間に介護・支援を必要とする住民が町中にあふれ、耕作放棄地も増えています。ウクライナ・ロシア戦争、加えてパレスチナ・イスラエル戦争の勃発、それに伴う物価高騰と食糧危機、さらには「地球沸騰化の時代」と指摘されるように、かつてない規模の自然災害も世界各地で頻発。久留米市でも、2023年7月10日の記録的な大雨による土石流で死者2名。筑後川は氾濫こそ免れたものの、中小河川があふれ、各所で家屋や農地が浸水。世界的にも、久留米の地でも「もしも」が日常になってきています。一方、コロナ禍の3年間を経て、テレワーク、オンライン会議、オンラインショッピングなど様々な場面でデジタルが駆使され、人々の生活に変革をもたらし、離職することなく子育てや親の介護も可能となる新时代が拓けています。

これまで当法人は、「(一社)ほんによかね会」や「本業+α」「(一社)ぶらっとどっ」「そなえるくるめ」の一員として、個人や団体が自分の本業以外に居場所づくりや地域の振興、暮らしの支え合いを推進し、ひいては、「誰か」のために一步も二歩も踏み込むチカラ、すなわち「α力」を高め合ってきました。さらに、これらの個人や団体をつなぐため、久留米未来官民協働プロジェクト「コンソーシアムくるめ」に力を注いだことで、久留米の地で「α力」が育まれています。そして、「もしも」の災害に対しての「令和5年7月豪雨久留米連携会議」や官民協働での「地域防災会議」に、「α力」を蓄えた市民の皆さんのが主体的に参画し、さらに連帯を強めようとしています。

さて、今年の11月5日、コロナ禍前の規模で「第22回ボレボレ祭り」を4年ぶりに開催。天気にも恵まれ、これまでつながってきた1000人の仲間が祭りに参画し、約5000人の来場者が集う中で、共に手を取り合い、新しい時代を切り拓こうとする息吹が会場に満ちあふれていました。

①安武町で直売所、地域食堂等を運営 ②本業以外に地域の居場所づくり等を取り組む
③6頁にて紹介 ④コロナ禍の「そなえ」の情報発信から災害全般の「そなえ」を研修・発信
⑤支え合う小規模のコミュニティづくりとそのプラットフォームづくりを推進

<写真>2023年7月 水害で被災した久留米市東部

少子高齢、人口減少、そして「地球沸騰化の時代」

と共に手を取り、共につくろう。新時代 その1



持続可能な施設と持続可能な地域に

安武町に「出会いの場ポレポレ」を開所して22年。10年先を見据えて持続可能な施設マネジメントを推し進めている。今回は「出会いの場ポレポレ」とグループホーム「ニュンバ」を対象として利用者の安全・安心の確保、エコ対策として調査や議論を重ね、2023年4月から7月にかけて大規模工事に着手。屋根の防水工事に加えて古いエアコンを省エネのエアコンに、電灯をLEDに交換し、吹き抜けがあったカリブホールの天井を下げることで熱効率を上げて、かつ使い勝手を良くした。さらに省エネ対策として「ニュンバ」の屋根に太陽熱温水器の設置を進めている。また、高齢者も障がい者も腰を痛めないよう配慮



し、介護ロボット「ハグ」をそれぞれ導入、2階の浴場にはリフトも備え付けた。

安武町はもともと筑後川に面した純農村地区。しかし、農家の皆さんは先々の不安をもらす。「5年もすればあちこちに耕作放棄地が増えてくる」と。70代、80代の農業の担い手が一挙に減れば、空き家や耕作放棄地の増加は農村の荒廃につながり、ますます人口の流入が減少、地域から人の姿が消えてゆく。もちろん田畠の荒廃によって土壤は水を溜める働きを失い、風雨によって大きな災害につながるかもしれない。当法人にとっても、JAくるめ安武農作物直売所「そらまめ」(以下・そらまめ)と地域

食堂は、ポレポレの利用者や職員、地域住民にとって「働く」という活躍の場。この先、活動が維持できるのか、生き残っているのか。

ポレポレ開所当時から農業に想いを抱いてきた。利用者の保護者が「ポレポレ農園」を耕し、野菜を販売。法人を挙げての取り組みとしても、安武名産にちなんだ「そらまめ復興作戦」を展開した経緯がある。安武町に根を下ろし地域の皆さんと歩んできた社会福祉法人として、「野菜や米、麦、大豆を生産できないか」「一緒に農業をやれないか」と新たな決意で模索をはじめている。

安武の若手農業者の結婚を祝う会

(一社)ほんによかね会が設立して7年、同会が運営する「そらまめ」に集い、苦楽を共にする会員達。そこでさまざまな物語が生まれている。

「永松君の結婚を祝う会、わたし達で開こうよ」

2023年9月、こう呼びかけた。安武町の専業農家で、同会理事の永松雅樹さん(28歳)が瑛梨香さんと4月に入籍をしたと聞き、仲間の人生に寄り添いたいと思ったからだ。彼は地域で一番若い農業者でもある。「結婚を祝う会」当日、26人が集合。何をスピーチするかはサイコロ次第、老若男女の一人ひとりが心をこめたスピーチをした。オープニングムービー、プレゼントやケーキを持ちこむなど素人の手作り企画であったが笑顔の絶えない、とても心温まるお祝い会となった。会場は高齢世代が多く現役世代が少ない、まさに安武町の人口構成の縮図といえたが、「現役世代が『かすがい』となり高齢者の活躍するステージを創っていく」というカタチが見えた気がする。



今やそれが大家族の一員のような存在であって、しかも各自の活躍の場でもある。このつながりをさらに発展させたいという気持ちが強くなった。

永松さんは稻刈り、稻の乾燥など農繁期に入って忙しい日々。その激務をこなしつつ、出産を控えた瑛梨香さんを伴い直売所で夜遅くまで、仕入れた野菜や魚に商品値札をつける姿があった。そして今、同会の代表理事を務めてほしいという会員の願いに、永松さんは応えてくれた。

今後は若い農業の担い手と一緒に進めるのが地域づくりの大きなカギとなる。当法人の若手職員が永松さんのような若手とつながり、そこに高齢者も障がい者も加わって力を合わせてゆく。それぞれの活躍と役割の場が生まれるようなフラットな関係で一緒に未来を拓いていくければ、地域が持続的に発展していくかもしれません。

※(一社)ほんによかね会がJAくるめ安武農作物直売所「そらまめ」と地域食堂を運営。当法人は、公益事業の一環としてその活動に参画しています。



グループホーム365日体制 親なき後、あたりまえに地域で暮らすとは。

2023年8月より当法人は、「グループホーム365日体制」へ。

共同生活援助とはいって、カタチは施設暮らし。

※「脱施設化」から遠ざからないか。

「あたりまえに地域で暮らす」を理念に掲げる私たちは、矛盾を抱えながら日々の実践を積み上げています。

ポレポレ居宅介護支援センター 管理者 小川 真太郎

グループホームの暮らしと脱施設化

グループホームの利用者はこれまで週末は帰宅し、ご家族と一緒に過ごしていましたが、親御さんの入院などで当法人が緊急的に土日の対応をする場面が増えた点から、「グループホーム365日体制」を導入しました。

平日のグループホームでの暮らしはどうしても効率化を重視。利用者は日中活動から戻るとお風呂や食事を決まった時間で順番を決めどんどんこなします。スタッフ配置も限られており、日々同じ流れで支援できるように、ミスのないようにルールやマニュアルを積み上げてきました。ところが逆に日課が決まっていると、食べたいときに食事ができない、外出したくても急には行けないなど柔軟な対応とはかけ離れた事態も増え、また、利用者自身が決定や選択する場面も少なくなりがちです。ルールを決めれば決めるほど、私たちの理念とは対照的に「脱施設化」から遠ざかり、いわゆる「施設化」につながるのではなく改めて気づき、支援のあり方を問いかけています。



※「障がい者を施設に閉じ込めるな」とする主張。

●グループホーム(共同生活援助)

当法人には3ヶ所。障がいが重くとも入居者の状態に応じて必要な介助を提供し、親元を離れた生活が送れるよう支援しています。



「あたりまえ」の暮らし方を探る

「疲れたから今日は休もっか」「昨日は外出したからね」週末のグループホームでは、土日の過ごし方を利用者が選択しています。4~6名の少人数での活動を行い、平日とは違う時間の過ごし方、生活の幅を少し広げようと試みています。スタッフも利用者も動きやすいように自由度をもたせ、寄り添うのは、スタッフだけではなく知人、地域や学生の皆さん。「掛け合わせ」でチームを作り、利用者は地域の方とカラオケしたり、学生さんと外出して美味しいものを食べたり。料理が得意な方をホームにお誘いし、みんなで調理しながら食卓を囲みご飯を食べようなど、次々にアイデアが思い浮かびます。自由に外出、買い物して楽しむ、人の出会いがある、これらは特別なことではなく誰もが考える「あたりまえに地域で暮らすこと」。土日活動の実践から学びながら、平日の暮らしも利用者の選択や意思決定を大切にしながら進めていきたいと思います。



耳納山麓・御井町の仲間たちと共に——。 利用者、保護者、地域住民の高齢化に向き合う。

久留米市東部に位置する「夢工房(御井町)」は、耳納連山の最西端、神の住まう「高良山」の麓にあります。開所から35年、地域の歴史や里山保全などの活動にあまり目を向けていません。クリーづくり、カフェ運営、施設外就労など、障がい者の「働く」に力を入れてきました。保護者も地域の皆さんも高齢化へ。新たに何か始められないか踏み込んでみたい。

夢工房 管理者 野上 真紀子

夢工房
「高良山メンマ」
の作業

「共に生きる仲間」として

2022年、夢工房35周年記念の「ポレポレ祭り(夢気球トリビュートコンサート)」に取り組む中で、利用者の保護者の高齢化を実感すると共に、「夢工房」は障がいのある当事者や保護者、教員、地域の人、学生が、「共に生きる仲間」として育ち合ってきたことに気づかされました。法人内では「利用者」ではなく、「メンバー」と親しみを込めて呼びますが、「支援」というサービス提供者の立場で関わってきたのではないかと自問も。利用者や保護者、地域の方々の高齢化に目を背けてはいけないとthoughtいました。

2023年3月よりグループホーム「御井あんだんて(以下・あんだんて)」を利用して、月に2泊の体験宿泊を開始。保護者にとって40年以上暮らしてきた我が子と離れるのはきついこと。すぐに別々の生活ではないにしろ、新たな暮らしを体験し先々につなげていく、そしていざという時のためと備えての宿泊体験です。将来を見据ながら仲間の暮らしの場づくりを考えていきたいと思います。

御井町で新たなご縁を

4月より、「あんだんて」を借用して地域食堂の「つむぎ食堂」を始めました。保護者を始め、「夢工房」や「あんだんて」の有志スタッフ、地域の皆さんは、大変ながらも毎回にぎやかにお弁当づくりをされています。その姿を拝見するにつれ、双方の活動や運営そのものを根本的に変える時ではないかとも思います。



そして、この春、御井町で「歴史ある高良山の竹林を美しくしたい」と熱く語る方々と出会いました。高良山竹林環境研究所の皆さんには荒れた竹林を整備して収穫、純国産メンマをつくり多くの人に届けたいと奮闘。こちらが内なるエネルギーを呼び起こされた思いです。

「夢工房」はメンマの味付けと袋入れの作業を受託。今後、竹がつなぐご縁を大切につむぎたいと願っています。

また、7月の記録的な大雨で耳納連山の麓が水害を被り、東部の住民の皆さんは復興に立ち向かっています。御井町の仲間である「夢工房」「あんだんて」として、その役割を真摯に考えていきたいと思います。



Leoとぶらっとが 織りなす物語 その⑥ 4年目、「育ち合う」関係をつくりたい。

(一社)ぶらっとどつとは、「ぶらっと.荘島

2023年10月で

当初掲げた目標は、「ひと」と

多くの人と、ここで出会い、つながった3年間、そして今、
一般社団法人ぶらっとどつ 常勤スタッフ 秋満 美沙子

(以下・ぶらっと)を拠点に活動を始めて、
4年目に入りました。

「ひと」がつながる場を目指すこと。

「育ち合う関係をどうつくったらしいか」模索中です。

出会いの場Leo 管理者 溝尻 博子

「父友」の輪を作る機会に。

今年8月、初めて「父親の会」を開催しました。きっかけは、「お母さんとはよく話すけれど、会話をしたことのないお父さんも多いね」とスタッフがもらしたこと。そこで「父親会をしませんか」と踏み込んでお父さん達に提案。すると自宅でほとんど料理をしないというお父さんが、「夕食を作って妻や子どものために持ち帰りたい」と。私達の視点では生まれなかった言葉だと感銘を受けました。当日は、家族のために野菜を切ったり揚げ物をしたり。少し慣れた手付きの方もいれば、全くの初心者の方も。きゅうりを切る!! 野菜にお肉を巻く!! といった作業に集中して取り組む姿がとても印象的でした。テーブルを囲む頃には、皆さんも徐々に打ち解け、子育ての悩みはもちろん、「家事は何をしていますか?」など話題がプライベートまでに拡大!! LINE交換やグループLINEを作り、「今度は夜にお酒でも飲みましょう」と話は尽きず、「父友」の輪を作る機会になったと思います。

「育ち合う」に踏み込む

父親会の発足を機に、私達は「支援する」立場に満足していないか、との課題に向き合いました。支援する、されるという関係ではなく、みんなで一緒に考えたり悩んだり、そして解決したりすることで、きっとお互いの「生きる力」をアップできると思うのです。そして、父親や母親だけで集まって交流し、何かを企画実施するなど、保護者同士が切磋琢磨してゆく「育ち合う」のカタチに一步踏み込めないか、模索し始めました。そんな折、「第22回ポレポレ祭り」の大舞台で父親会が「(一社)ぶらっとどつ」とチームを組み、「カレー店」の出店を決定。事前に試食会を行い、当日は店先でLeoのスタッフが立ち働くことなく、父親達の頑張りで切り盛りを。緊張しつつも活き活きと取り組まれ、「充実した1日!」「あっという間だった」「来年もやりたい!」と前向きな感想が。「初めての事に力を合わせての挑戦」から「保護者の自分達も何かがやれる」と実感できたのが、何よりも収穫だと思っています。

自然との共存・農業体験にチャレンジ

今年度は初めて民間財団の子ども若者応援成金を受託。新企画のひとつは農作業。何でも買える時代だからこそ、自分達の手で一から農作物を育てその成長を見届けてほしいからです。「何を植えたいか」を子ども達で話し合い、農家のアドバイスを受けながら、真夏に彼らは畑でオクラを収穫。暑さとオクラの産毛で生じる痒みと闘いつぱく詰め、一枚一枚手書きのメッセージをつけてぶらっとで販売しました。10月中旬には大根・人参・ごぼう・ラディッシュなど根菜の種まき。「めんどくさい」が口癖なので、きっと途中で投げ出さに違いないと。しかし、何を植えたいかを考え種を選び、ラベリングするうちに真剣な顔に。足腰の痛みに弱音を吐きながらも、約300本分の大根や人参の種を蒔ききり、11月末、寒さの中での収穫もやり遂げました。今回の農業体験などを積み重ねることで、子ども達は災害多発の時代を生き抜くチカラを備えることができると思います。

誰もが主体になって育ち合う関係

新企画の2つ目。ぶらっとには、障害者就労支援事業所帰りの若者二人「いつメン」が立ち寄ります。「いつものメンバー」の略称です。彼らはぶらっとで宿題をする子ども達とカウンターで顔を合わせて自然に会話を交わし、子ども達の騒がしさに注意することも。「いつメン」は大の列車好きで九州圏内のダイヤなどを熟知。その特技を生かそうと「手をつなぐ育成会」と企画し、9月に「みんなで行こう!空港ツアー」を実施しました。保護者・ボランティアなど含めた総勢33名の大所帯が、彼らの計画に沿って空港まで順調に移動。普段は支援・配慮されることが多かった「いつメン」が、その個性や技能を駆使して子ども達のサポート役として活躍しました。

Leoとぶらっとの織りなす物語が始まり、多様な催しを掛けた中から得難い経験が生まれ、支え合う文化が蓄積しつつあります。4年目はさらに育ち合う関係づくりへ。誰もが主体になれるステージを創りたいと思います。